

出会いの数々が今も私の宝物

絵本作家 ましませつこさん

絵本は貴重な存在

戦中・戦後は、物資が不足していて、絵本は簡単には手に入らなかった時代でした。たまに本屋に入る絵本を母は、取り置きをお願いしてくれました。わら半紙のような粗末な紙に印刷された絵本を兄弟5人で廻し読みしていました。今も大切に持っています。

自覚はなかったのですが、絵本を描きたいという想いは、小さな頃からあったようです。小学2年生位の時だったと思います。教会のバザーに、自分と飼犬のことを、可愛く書いたつもりで絵本を出品したのですが、誰にも全く見向きもされず挫折感を味わいました。当時、兄弟それぞれ自分の花壇に好きな植物を植えていました。私は自分で種を蒔いて育てたポピーが、ある朝、突然、色鮮やかに咲いた時の感動は、今も忘れられません。すぐにクレヨンで写生しました。その頃から、遊びの一つとして絵を描く喜びを知ったと思っています。



日本の良さを次世代へ

都内の美大を卒業した後は、デパートで海外から入ってくる最新のファッションや商品の広告デザイナーとして、「外国に追い付け追い越せ」の時代を目まぐるしく過ごしていました。そんな中、久しぶりに山形の実家に帰った時の驚きといたら……。茶の間に座って見廻すと、見慣れたはずの障子や火鉢、古伊万里の砂糖壺等、そして、蔵の古い筆筒からは、江戸時代の子どもたちの華やかな着物やおもちゃも出てきました。母屋に戻った時、ラジオから「わらべうた」が聴こえてきました。その時、ふと、忘れかけられていた子どもの文化「わらべうた」の楽しさを、今の子ども達に、絵本の形にして伝えたいと思いました。

それから、デパートの上司に背中を押されて広告の仕事しながら、絵本を描くようになりました。初めて出来た絵本が『わらべうた』（福音館書店）です。

その後、児童書の出版界をリードして来られた松居直さん、石井桃子さん、まど・みちおさん、長谷川摂子さんなど、多くの素晴らしい作家や詩人、編集者との出会いがあつて今があります。もともと引つ込み思案の性格ですが、思い返すと、チャンスがある度にしっかりと「やってみたい」と言つて意思を伝えてきたような気がします。

自分らしく仕事をする

絵本は楽しみながら、そして何より子どもた

ちに喜んでもらいたいと願いながら描いています。また、絵本を読んでくださった方々からの手紙等は、嬉しく、励みになっています。

結婚を機に清瀬市に移住して40年以上。建て替えたタイミングで一度は清瀬市を離れることも検討したのですが、建築家に「池袋まで30分。こんなに自然豊かな土地はない」と言われて、住み続けることに決めました。

今は、近くにある「せせらぎ公園」に遊びに来る子どもたちの可愛さに心和まされています。

絵本は子どもと繋がる大事なツール

スマホ等、便利なものがある時代ですが、どうか子どもたちにたくさん絵本を読んでもあげてください。絵本を、いっぱい読んで育つた子どもは、賢く豊かな大人になって楽しい人生を送ることができると思っています。

「インタビューを終えて」

デパートのオリジナルカレンダーの仕事で50年以上続けてこられたそうです。出会いと縁に感謝の気持ちをお忘れず、大切にしてこられたお人柄の表れであらうと感じています。

(インタビュー 栗山)



大切にしている子ども時代の絵本



色彩の豊かな絵本の一部と『このへやあけて』にも登場するマトリョーシカ